

東松本『大鏡』裏書所引枕草子本文の検討

沼尻利通

はじめに

『大鏡』の原態は卷子本であつたようである。その巻物の紙背に、注が書き入れられた。これが「大鏡裏書」である。その「大鏡裏書」が、卷子本から冊子本に書写されるさいに、本文の間に分けて書き入れられた。これが「裏書分注」である。裏書分注を持つ『大鏡』諸本は「裏書分注本」と呼ばれている。

『大鏡』の現存最古の完本は東松本で、文永二年（一二六五年）以後に書写されたものである。卷子本である。やはり紙背に裏書があり、その量が豊富であることはよく知られている。東松本の裏書は、裏書分注本のものになつた裏書とは、すこし距離があるようで、裏書分注本の裏書は東松本に比して少ない。東松本の裏書と、裏書分注本の裏書とは同根のものではなく、別の成立のようである。裏書分注本の裏書を抜き出したものが『大鏡裏書』と呼ばれる書物である。

東松本裏書と『大鏡裏書』には、枕草子が引用されている。ただし、同じ箇所を引用してはいない。東松本裏書は「杜は」の蟻通説話、『大鏡裏書』は「清涼殿の丑寅の隅」の藤原芳子の古今集丸暗記のエピソードが、それぞれ引用されている。本稿では、東松本裏書に引用された蟻通説話の箇所と、現存する枕草子本文を比較検討していきたい。

一、東松本裏書の枕草子

東松本裏書は、松村博司校注『大鏡』日本古典文学大系（岩波書店 一九六〇年 四〇一―四〇二頁）に翻刻が載せられている。ほかにも、保坂弘司『大鏡新考』（総釈・論考篇下 學燈社 一九七四年 四九七―四九八頁）、同『大鏡裏書』の訓注とその考察（第六卷）（『大鏡研究序説』講談社 一九七九年 五五七―五五八頁）がある。これは、前者の注釈を、後者の研究書でまとめたもの。ここでも、忠実な翻刻と注が付けられ、読みやすいように校訂したもの

のも示されている。

東松本裏書に示された『枕草子』「社は」の蟻通説話を、長くながるが引用する。以下、東松本裏書の枕草子本文を「裏書本文」と呼ぶ。なお、その本文は日本古典文学大系本によった。引用にさいして、段落分けをおこない、ポイントとなる箇所には黒丸数字と傍線、白丸アルファベットと二重傍線を付した。

清少納言枕草子云このありとほしとつけたる心はまことにやあらんむかしおはしましけるみかたとゝわかし人をのみおほしめして冊になりぬるをはうしなはせ給ければ人のくにのとをきにゆきかくれなんとさらにみやこのうちにさる物のなかりけるに中将なりける人のいみしうときの人にて心なともかしこかりけるか七十ちかきおやふたりをもちたりけるにかう冊をたにせいありまして④とをちさはくをいみしう孝ある人にてとをきところには①さらにえすませし一日にひとたひみてはいかてあらんとてみそかに②よるいゑのうちのつちをほりて③そのうちにやをたてゝそれにこめすへていりつゝみる人にもおほやけにもうせかくれたるよしをしらせてありなとかいゑにいりゐられんをはしらすておはせしかうたてありけるよにこそ④このをやはかんだちめなどにはあらぬにやあらん中将なと子にてもたりけんは⑤こゝろいとかしこくよろつのことしりた

りければこの中将もわかかれと⑥いとさへありいたりかしこしとて時の人におほすなりけり

もろこしのみかとのくにのみかのをいかてはかりてこのくにをうちとらんとてつねに⑦心み事をしあらかひことをしつゝおくりたりけるにつや／＼とまろに⑧うつくしけにけつりたる木の二尺はかりあるをこれかもとすゑいつかたそとゝひにたてまつりたるにすへてしるへきやうなかりければみかと⑨おほしわつらひたるにいとをしくておやのもとにいきてかゝることなんあるといへはたゝはやからん河にたちなから⑩よこさまにうちいれてみんななかれてかへりいかんをすゑとしるしてつかはせとおしふまいりてわかしわさかほに⑪さてこゝろみはへらんとて人／＼くしてなけいれたるにさきして⑫いくにしるしをつけてつかはしたればまことにさなりけり

⑬又五尺はかりなるくちなはのたゝおなし⑭なかさなるをふたつこれはいつかおとおおんなとてたてまつれたり又⑮人さらにしらすれいの中將いきてとへはふたつならへておのかたにほそきすはへしてさしよせむにおはたらかさんをゝんなとしれといひけりやかてそれも内裏のうちに⑯さしけるにまことにひとつはうかさすひとつはうこかしければ又しるしつけてつかはしけり

ほとひさしくありてなゝわたにわたかまりたる玉の
なかとはほりてひたりみきにあなあきたるちひさきた
てまつりてこれにつなとほしてたまはらんこの国にみ
なしはへること也とてたてまつりたるにいみしからん
ものゝ上手¹⁷ふようなりとそこらの上達部よにありと
ある人いふに又いきてかくなんといへはおほきなるあ
りをとらへてふつばかりこしにほそきいれをつけて
又それにいますこしふときいれをつけてあなたのくち
に蜜をぬりてみよといひければさまうしてありをいれ
たるに蜜のかをかきてはふこといとうあなたのかち
にいてにけりさてそのいとつらぬかれたるをつかはし
てのちなん¹⁸なを日本の国はかしこかりけりとてさる
こともせさりけり

この中將をはいみしき人におほしめしてなに²⁰わさ
をいかなる²¹つかさくらゐをたまはるへきとおほせら
れければさらに²²つかさかふりもたまはらしおいたる
ちゝはゝのかくれうせて侍をたつねてみやこにすま
することをゆるさせたまへとまうしければいみしくやす
きことゝてゆるされければ²³みな人のゆるされければ
よろつの人のおや²⁴これをきゝてよろこふこといみし
かりけり中將は²⁵上達部大臣になさせ給てなんありけ
る

さてその人は神になりたるにやあらんその明神のも

とにまうてたりける人によるあらはれてのたまひける
なゝわたにわかれるたまのをゝぬきてありとほし

²⁵ともしらすやあるらん

と²⁰の給しを人のかたりし

引用した箇所『枕草子』蟻通説話の概要を述べてお
きたい。昔、四十歳以上の人間を殺し、若い人を好んで重用
する帝がいた。中將は孝心があつく、屋敷の中に穴を掘り、
その中に住む場所を作り、七十歳の両親を隠した。表向き
は両親が逃げたことにした。この中將は帝から重んじられ
た（第一段落）。唐帝が難題を吹っかけ、国を篡奪しようと
していた。ある時、唐帝から、削られた二尺の木が送りつ
けられてきた。根本と末端の区別をせよという。帝は困つ
た。中將は親に相談すると、親は、川に木を投げ入れて、
立って流れる方を末端と印を付けて送るがよい、と回答し
た。言う通りにしたところ、その難題は解決した（第二段
落）。次に、唐の帝から、蛇が二匹送られてきた。雄雌を見
分けろという。皆わからない。中將は親に相談すると、二
匹の蛇を並べ、尾に向けて若枝を寄せていき、尾を動かさ
ない方を雌とせよ、と回答した。実際にやってみると、一
匹の蛇は尾を動かし、一匹の蛇は尾を動かさないもので、印
をつけて唐に送り返し、難題は解決した（第三段落）。し
ばらくしてから、今度は曲がりくねって七曲がりとなった玉
で、中が貫通して左右に穴が空いているものが送られてき

た。この玉に緒を通せとの難題である。いくら器用な人でも、できない。中將は親に尋ねてみると、親は、蟻の腰に細い糸をつけ、その糸にさらに太い緒をつないで、向こう側の穴に蜜を塗ってみよ、と答える。その通りにしてみたところ、蟻は蜜のにおいにつられ、穴を通り、それによって七曲がりの玉に緒が通された。これを返すと、唐帝は「日本の国は賢い」と難題を吹っかけてくることもなくなった（第四段落）。帝は中將に報いようとした。中將は官爵よりも、失踪した両親を都に住むことを許してほしいと要求し、それにより許され、皆の親も喜び、中將も大臣にのぼりつめた（第五段落）。その人は神になったようで、蟻通明神に参詣した人の枕元にあらわれ、「七曲がりの玉の緒を蟻で貫いたとは人は知らないだろう」との和歌を詠んだ、と人は語り伝えた（第六段落）。

現存の枕草子の諸本は、雑纂形態と類纂形態の二種類に分類できる。さらに細分化すると、雑纂形態のものに三巻本、能因本。類纂形態のものに堺本と前田本。大きくわけて四種類がある。この蟻通説話は、現存の枕草子では三巻本、前田本、能因本にある。それぞれの本同士を比較してみると、表現上の微妙な異同が多く、話の筋が違うほどの表現の異同はない。

三本の枕草子現存本と裏書本文を比較すると、三巻本に近いように見える。具体的に、**④⑤⑦⑨⑪⑭⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓**

㉔の箇所は三巻本と近い本文である。ざっと確認してみる。
 ④「このをやはんかたちめなとはあらぬにやあらん」は、点線部「この」「あらぬにや」の箇所は三巻本に一致しており、能因本や前田本は点線部を欠いた「おやは上達部などにやありけん」との本文である。⑨は帝が「おぼしむらひたる」で、三巻本に一致。能因本・前田本は「おぼしむらわづらひたる」と、帝に対しての敬意が高いものとなっている。⑲「なを日本の国」は、三巻本は「猶日のものくに」、能因本・前田本は「なを」と「の国」がない「日本」だけ。㉒「つかさかふりも」は、三巻本では「つかさもかうふりも」で、能因本・前田本「つかさくらゐも」よりも、三巻本の方が近い。㉔「上達部」は三巻本のみに「かんなちめ」とあり、能因本・前田本ともに欠いている。このように、裏書本文は、三巻本に近いものから引用しているように見える。

二、東松本裏書所引枕草子と前田本、能因本

裏書本文は、三巻本からの引用なのだろうか。どうもそう単純な話ではなさそうである。前田本と三巻本の本文が近く、さらに裏書本文と近似する例が、**②⑧⑬㉑**の四箇所ほど確認できる。②「よるいゝのうちの」は、点線部「よる」に該当する本文が、三巻本は欠き、前田本は「夜く」、

能因本も「よるく」。点線部下の「いゑのうちの」は、能因本は欠き、前田本「家のうちに」、三巻本「いへのうちの」。「いゑのうちの」の箇所に関しては、裏書本文は前田本、三巻本に近い。③「うつくしげに」は、能因本「うつくしく」、前田本、三巻本は裏書本文に同じ。⑬「さしけるにまことに」は、点線部の箇所が能因本は「れは」、前田本、三巻本は点線部と同じ。⑭「つかさくらゐをたまはるへき」は、「つかさ」を欠くのが能因本、点線部「つかさ」と同じものが前田本、三巻本。ただし点線部「をた」の二字の間に、前田本、三巻本、能因本ともに「か」が付き、「たまはるへき」のところ、能因本が「給はるへき」と近く、前田本、三巻本ともに「給へき」とする。

前田本は、鎌倉時代に書写されたもので、枕草子諸本中最も古い。前田本の本文の性格は、能因本と堺本を混成したもので、後世の人間による再編集本であることが明らかとなっている。したがって、前田本と能因本が近似するという例は多い。裏書本文でも、五箇所(①③⑫⑬⑮)ほどが、能因本と前田本、裏書本文が近似する例が確認できる。①「さらにえ」のところ、「え」は前田本、能因本、三巻本ともに欠けるが、「さらに」は三巻本に欠き、前田本、能因本にもある。③「いとさへあり」は、「いと」は前田本、能因本は欠き、三巻本はあるが、三巻本はその下「さへあり」ではなく「きこえあり」で、前田本、能因本は「さえ

あり」と裏書本文に近い。⑫「いく」はその下に「かた」を付すのが三巻本で、前田本、能因本は裏書本文に同じく「いく」の下は「にしろし」と続く。⑬「又五尺」は三巻本のみが「又二尺」で、前田本、能因本は「五尺」。ただし、「又」があるのが三巻本のみ。前田本、能因本ともに「又」を欠く。「二尺」は、唐帝から送られてきた削られた木の長さと同じなため、あるいは三巻本の誤写の可能性もある。⑮「とも」は、前田本、能因本ともに同じ。三巻本は「とは」。これらは、裏書本文が前田本、能因本と近い例である。また前田本単独で裏書本文と近似する例は一例(⑮)ある。枕草子の蟻通説話の末尾「の給しを人のかたりし」のところ。前田本は「の給しと人のかたりし」とあり、能因本「宣ひけると人のかたりし」、三巻本「の給へりけると人のかたりし」。能因本と三巻本が近く、前田本が孤立し、それが裏書本文と近い例である。

現存本と裏書本文を比較すると、前田本、能因本、三巻本を混合しているかのようなものが三箇所(⑧⑩⑬)ほど確認できる。中將が自分の屋敷に穴を掘り、そこに家を建てるところで、⑧「そのうちにやをたてゝそれに」と裏書本文で語られる。ここは、「そのうちに」は三巻本のみであり、前田本、能因本は欠く。「たてゝそれに」は、前田本が同文だが、能因本は「つくりてそれに」、三巻本は「たてゝ」で、「それに」を欠く。前半は三巻本、後半は前田本という

混合したような本文と言える。⑩「よこさまにうちいれて
みんになかれてかへりいかん」は、三巻本では、「よこさま
になけいれてかへりてなかれんかた」となっている。前田
本、能因本は「なけいれてみんにかへりてなかれんかた」
とする。「よこさまに」は三巻本にあり、前田本、能因本に
欠く。裏書本文「うちいれてみんに」は、三巻本「なけい
れて」で「みんに」がなく、前田本、能因本「なけいれて
みんに」は「なけいれ」で、「うちいれ」ではない。ただ、
前田本、能因本は「みんに」がある。裏書本文「かへりい
かん」に該当するところは、三巻本「かへりてなかれん」、
前田本、能因本「かへりてなかれんかた」で、距離がある。
裏書本文、三巻本、前田本、能因本は「かへり」は一致す
るが、「いかん」（裏書本文）、「なかれん」（三巻本）、「な
かれんかた」（前田本、能因本）が不一致である。「流れ」を
「行かん」と解釈したのかもしれない。⑪「人さらにし
らす」は、前田本「人さらにえみしらす」、能因本「さらにえ
しらす」、三巻本「さらに人えみしらす」である。「人」の
位置が、裏書本文と前田本は一致し、三巻本は「さらに」
の下に「人」がくる。能因本には「人」はない。「さらに」
は皆一致するが、次の「しらす」は、能因本は「えしらす」、
前田本と三巻本は「えみしらす」とそれぞれ小異がある。
強いて言えば前田本に近いと言えようが、前田本は「えみ」
が余計である。

三、東松本裏書所引枕草子の独自本文

前田本、能因本、三巻本のいずれにもあり（または、な
く）、裏書本文にない（または、ある）という本文箇所は、
白丸アルファベットと二重傍線の箇所である。①「まして
とをぢさはぐ」は、能因本と前田本は「ましていとおそろ
し」とをちさはぐ、三巻本は「ましておそろしとおちさは
く」である。点線部の箇所が裏書本文にはない。ここは「四
十でさえ（棄老の）きまりがあり、ましてや（七十の両親
を世話するなど）恐ろしい」と怖じ騒ぐ、というところ。
「まして」以下の「いと」おそろし」がなかったとしても、
「まして」があるために、省略してもよいところではある。
ただ、心情をより丁寧に描くのなら、現存本のように「（い
と）おそろし」があった方がわかりやすい。

②「みな人のゆるされければ」は、現存本三本ともない。
ここは、三度の難問を中将が解決した功により、帝がそれ
に報いようとするところ。中将は官職よりも年老いた親を
都に住まわせることを許して欲しいと述べて、帝は「それ
は簡単なことだ」と許すのである。これにより帝の棄老政
策は改められたらしく、「みな人のゆるされければ」皆が許
されて、万人の親は喜んだという。

この箇所、現存本三本では、「みな人のゆるされければ」
の文言がないため、いささか飛躍があるように感じられて

しまう。現存本では、中將の親が許され、これにより万人の親は喜んだ、というのだが、万人の親は許されたのか、すなわち棄老は改められるようになったのか説明されておらず、不透明なのである。中將の親が許された（個人）こと、すなわち個人の次元のことが、即ち皆の親も許された（公）という、公の次元の話とは食い違うのである。もちろん、多くの読者は、中將の親が許されたのだから、皆の親も許されたのだ、ということを通して頭の中で補って読むであろう。だから、万人の親はそれを聞いて喜んだ、と。ただ、わかりやすさ、理屈の通りとしては、裏書本文の方がより丁寧である。しかし、この⑥の前に「ゆるされれば」があり、それに続く形で「みな人のゆるされれば」と、「ゆるされれば」が二度重ねられるところは、いささかまどろっこしい。ここは裏書本文の過剰な説明なのか、あるいは原本通りなのか、よくわからない。

以上、裏書本文と現存三本を比較したが、おおむねとしては三巻本に一致する。しかし、細部では前田本、能因本、あるいはそれら三本を混合したような本文もみられることが確認できる。現存本そのものから引用したとは判断できず、現存本により近い本文からの引用とするのがよいと思われる。

四、東松本裏書所引枕草子の位置

枕草子の現存本で、鎌倉時代のものは前田本のみ。裏書本文が書かれたであろう年代と同じものは、前田本のみ、ということになる。しかし、先に検討したように、前田本そのものからそっくり引用したとは考えられない。そもそも、東松本裏書の本文は、注釈であるため、引用にさいして何がしかの省略や改変がおこなわれたと考えることもできる。したがって、純然たる本文研究に用いることは、いささか問題がなくてはならない。ただ、鎌倉時代の枕草子本文の流布状態を考えるに資する資料ではある。

裏書本文が、多く三巻本に一致していることは、示唆的である。三巻本は藤原定家が書写に関与したらしいことが、その奥書からも明らかにになっている。ただ、奥書の口吻を見ると、もともと持っていた本を紛失し、「一両之本」を借りて書写したこと。そして、その書写は、確かな証本がないため、不審が残るとしている。はたして定家がどのような態度で「一両之本」を書写したのかは、明らかではない。いくつかの資料の分析から、鎌倉時代から南北朝時代、室町時代にかけて、枕草子の現存本とは違う本文が流通していたらしいことは推測されている。定家の「一両之本」のうち、あるいは一本が、裏書本文に近似する本文である可能性もないわけではなからう。三巻本がどの時代に、ど

の程度流通していたかは、まだ未解明である。藤原定家筆『臨時祭試楽調楽』に引用された枕草子本文は、三卷本に近いことが明らかとなっており、鎌倉時代の定家周辺には三卷本があったことは疑いがないものの、ただ定家周辺の女房の手になる『無名草子』に引かれた枕草子は、能因本らしく、流布本として能因本も読まれていたらしい。佐々木孝浩「定家本としての枕草子」によれば、南北朝期頃から三卷本は公家間での相伝は確認できず、おそらく寺院で保存され、僧侶や連歌師などにより細々と伝えられていたと推測されている。三卷本の定家以後の奥書を検討するに、定家の後にも、三卷本は微妙な改変がなされたらしいことが推測できる。今日の三卷本が、定家の面影を濃厚に残していることは否定しないものの、やはりダイレクトに定家本に繋がるとは考えづらい。

加藤静子は、東松本裏書は金沢文庫の関係者によってなされたこと、すなわち鎌倉方で注が加えられたらしいことを指摘した。¹⁰ 鎌倉時代の関東方の宇都宮歌壇には、西円という歌僧がおり、枕草子を所持していたらしい。西円所持本枕草子は、堺本に近いものの、今日の堺本のような類纂形態ではなく、雑纂形態のものだと推測できる。¹¹ ただ、西円所持本枕草子と裏書本文との距離は不明である。おそらく金沢文庫の関係者が入手し、大鏡裏書に用いた枕草子は、西円所持本とは違った系統のものと考えるべきであろう。

となると、三卷本により近いもの本文、しかし、今日の三卷本とは微妙に違うものが用いられたことになる。

東松本裏書の書かれた時代よりも、いささか時を隔てるが、秦宗巴の『徒然草寿命院抄』に引かれた枕草子本文を検討した村井順は、その本文が三卷本に近いものではあるが、しかし微妙に三卷本とは異なっていることを指摘している。やはり、三卷本も、静的ではなく、動的な性格を持つ本文であったと考えるほかない。

おわりに

本稿では、東松本裏書の枕草子本文と、現存する本文と比較してみた。前田本と三卷本が近似し、裏書本文と近似するのが四箇所、能因本と前田本が近似し、裏書本文と近似するのが五箇所、前田本と裏書本文が近似するのが一箇所、三本とも混雑しているように見えるところが三箇所。裏書本文の独自箇所は二箇所。三卷本と裏書本文が近似するところが一三箇所。現存本の中では、三卷本に近いと言えそうだが、現存の三卷本からの引用ではないことは、言を俟たない。

枕草子の諸本分類を、大きく四種類とする、現在の分類は、現在において有効ではあるが、過去においてはどれほど有効であるかは、疑問である。おそらくより多様な枕草

子があり、その淘汰現象の結果として、現在の四種類があるに過ぎないと考えるべきであろう。古典文学は拡散と収斂の営みのなかにあり、それは現在もとどまることはない。

注

1 「類纂」という分類用語は誤解を与えるため、「再構成本」と言い直す考え方もある（山中悠希「堺本枕草子の再検討——「再構成本」という視点——」『堺本枕草子の研究』武蔵野書院 二〇一六年）。ただし、分類名称として「再構成本」は賛成できない。「再構成」と言い始めたら、おそらく枕草子本文のすべてが包括されてしまうため、分類概念・用語としてはふさわしくないと判断できるからである。「類纂」や「再構成」に替わる、適当な分類名称が思いつかないため、本稿では旧来の呼び方「類纂」を用いた。

2 比較に用いた諸本の本文は、能因本・前田本は田中重太郎『校本枕冊子』（古典文庫 一九五六年 下巻一六二六～六三三頁）、三卷本は杉山重行『三卷本枕草子本文集成』（笠間書院 一九九九年 五九四～六〇三頁）を用いた。なお、必要に応じて、三卷本（『枕草子』陽明叢書圖書篇第一〇輯 思文閣 一九七五年 二五一～二五五頁）、前田本（『前田本枕草子』尊経閣叢刊 育徳財団 一九二七年 一五丁オ～一八丁ウ）、能因本は学習院大学本（『能因本枕草子』下巻 笠間書院 一九七一年 一二六～一三一頁）の写本の影印を用いて確認した。

3 ほか、取り上げなかった異同は以下の通り。⑤「こゝろいとかしくく」は、三卷本文。前田本、能因本ともに「いとこゝろかしこく」。⑦「心み事をしあらかひこと」は、三卷本「心みし」ことをしあらかひこと」と「し」が余分だが、三卷本他本では「し」のない「心

みことをしあらかひこと」もあり、裏書本に近い。⑪「さて」は、三卷本と一致。能因本と前田本「して」。⑫「なかさなるを」は、三卷本と一致。前田本と能因本「やうなるを」。⑬「ふようなり」は、三卷本と一致。前田本と能因本「ふようならむ」。⑭「とらへてふつはかり」は、三卷本「とらへてふたつはかりか」と近い。前田本「二とらへて」、能因本「ふたつとらへて」。⑯「わさ」は、三卷本と一致。前田本「事」。⑰「これをさへて」は、三卷本と一致。前田本「いきて」、能因本「いきて」。

4 楠道隆「枕草子異本研究（上）——類纂形態本考証——」『枕草子異本研究（下）——類纂形態本考証——』（『枕草子異本研究』笠間書院 一九七〇年）。

5 山内益次郎「枕草子諸本の分化と流布」（『国文学研究』第一七輯 一九五八年三月）。

6 田中重太郎「臨時祭試樂調楽」所引枕冊子の本文（『国語国文』第一四卷第六号 一九四四年六月）。

7 渡邊裕美子「藤原定家の『枕草子』」（荒木浩編『中世の随筆——成立・展開と文体——』竹林舎 二〇一四年）。なお、同論文では定家は、枕草子の証本作成に、さほど熱心には取り組んでいなかったことを指摘している。

8 『日本古典書誌学論』（笠間書院 二〇一六年）。

9 定家以後の奥書によると、三卷本は、秀隆兵衛督大徳、増運と伝わった。その増運所持本を、勸修寺教秀が書写したことになる（沼尻利通「陽明文庫蔵三卷本『枕草子』甲本の朱丸印と朱合点」『福岡教育大学国語科研究論集』第五六号 二〇一五年三月）。

10 加藤静子「東松本『大鏡』と『今鏡』断簡・旧尾州家蔵『源氏物語』」『裏書分註本系統の裏書』（『王朝歴史物語の生成と方法』風間書房 二〇〇三年）。

11 沼尻利通「異本紫明抄」所引枕草子本文の再検討」（『平安文学の

発想と生成』國學院大學大学院 二〇〇七年。西円所持本を、現存の堺本の成立と結びつけて考えることには、慎重であるべきとの意見もある（山中悠希「堺本の成立と生成・享受」『堺本枕草子の研究』武蔵野書院 二〇一六年。なお、西円とその古典学は、小林一彦「新和歌集撰者考——西円法師をめぐる——」（『三田国文』第九号 一九八八年六月）、栗山元子「鎌倉時代の『源氏物語』享受について——『光源氏物語抄』における西円の源氏学——」（中野幸一編『平安文学の交響——享受・撰取・翻訳——』勉誠出版 二〇一二年）に詳しい。

¹² 「つれ／＼草寿命院抄」に見える「枕草子」（『研究紀要（愛知淑徳短期大学）』第一五号 一九七六年二月）。

（ぬまじり としみち・本学准教授）